

北新地のキャバレーなどで休息をとりながら、お菓子やお寿司、飲み物をもらい、それらを袴のようなズボンの中にどんどん入れてお土産にした。

故郷を懐かしいと感じるには自分の記憶を呼び起こす場所やものが必要である。曾根崎のように変化することが当たり前の繁華街では、視覚的に思い起こすのがむずかしいが、変化が大きくても五感すべてを使えば懐かしさを感じられるところが見つかるのだ。

## 東大阪新聞の歴史

こやま ひろし  
小山 博

大阪府地方新聞協会代表幹事

情報化時代といわれているが、地域住民にとっては一番身近な出来事をいち早く知り、またそのニュースの裏側にある正確な解説記事を掲載している新聞があれば、全国紙よりもローカル紙に関心と興味を持つのではなからうか。

大阪東部の河内地域で58年間ローカル記者を続けている小生に、東大阪新聞発行人である小野元裕氏から、同紙の歴史について執筆を依頼された。

現在、大阪府内にローカル紙と呼ばれている新聞社は10数社あるが、東大阪市に本社を置く東大阪新聞が、私の知っている限りでは一番歴史が古い。

東大阪新聞は、昭和29年4月24日に

第3種郵便物の認可を受け、平成26年5月号で6846号を数えた。一時期、日刊東大阪新聞として、土・日を除く週5日発行していた時もあったが、長期にわたり週刊発行であった。ちなみに、現在は月2回の発行となっている。大阪府下のローカル紙で6846号の紙歴を持つているのは、恐らく東大阪新聞の他にないだろう。

同紙は、昭和26年ごろ八尾市役所東側の八尾市本町1丁目と和歌山県出身の三栖元氏が創刊。新聞だけでなく、『河内史談』という河内の歴史書も発行した。執筆者には作家の今東光氏ら錚々たるメンバーを迎えた。

3年後に長男・三栖昊氏が経営を引き継ぎ、八尾市を中心としたローカル紙として官公庁や各種団体役員、国会、府市議会議員、知名の士などを中心に読者を広げ、地域住民からも身近な情報がいち早く分かりやすいと評価を高めた。

昭和23年に市制を敷いた八尾市の初



自社印刷工場もあった東大阪新聞社。当時、編集長の筆者。

代市長・脇田幾松氏を擁護して「狸ばやし」というコラムを設けた。発足間もない八尾市の市政、

経済界の出来事をキメ細かく報道して好評を博していた。

昭和30年の秋ごろ、大阪市生野区で「中外タイムス」というローカル紙を発行していた税理士の高松朝雄氏が、布施、河内、枚岡3市を地盤に社員5、6人で活発な活動を展開。八尾市へも記者を派遣して中河内地域で地盤を固めようと、東大阪新聞と合併し、本社を当時の布施市中小阪に置き、昭和38年5月株式会社組織とし新社屋を建設した。1階を印刷工場、2階を編集室とし、昭和40年には日刊新聞を発行。近鉄大阪線と奈良線の現東大阪市内各駅の売店にも新聞を置いた。朝日新聞の売店に配達し、集金業務も委託するまでになり、社員は15人にもなった。

その後、主筆の笠松三郎氏が社長となった。同氏の死去により、昭和50年ごろから平成24年10月まで佐治史郎氏が社長を務めた。同氏の死去により、再び株式会社として小野元裕氏が代表取締役に就任。ユニークな紙面づくりで河内の地域社会でオピニオン・リーダー役を務めている。

## 「ゼロ」の発見

ふるかわ たけし  
古川 武志

大阪府史料調査会調査員

映画『永遠のゼロ』が話題である。

周知の如く百田尚樹氏の同名の小説の映画化である。戦争を知らない主人公が自分の祖父が特攻隊員であったことを知り、戦争というものに向き合っていくストーリーである。零式艦上戦闘機、通称「零戦」。太平洋戦争における日本海軍の主力戦闘機であり、その名は正式採用年が皇紀2600年(昭和15年)の末尾の「0・零」をとっている。太平洋戦争の開戦当初、その卓越した性能により、米軍兵士からは「ゼロファイター」と呼ばれて恐れられた。

そもそもゼロは「無」ということであり、インド人がゼロを発見したことはよく知られる。「無がある」ということの発見により、数学は革命的な発展を遂げた。仏教思想に代表されるインド哲学のふるさとならではと思われる。社会思想の上からゼロを考えてみよう。改新、維新、革命、変革…、仮に悠久の歴史を社会体制の変革(リセット)として捉える時、旧体制、旧制度、旧組織を取りあえずゼロにすることから始まる。そうしてその社会を形づくっていく思想は、常に「ゼロ」を発見することで成立するのである。

大阪における最初の「ゼロ」はいつか?今年、ちょうど400年を迎える大坂の陣で大坂が灰燼に帰し、あらたな町人の町として江戸時代に登場する時期。これは「町」としての大坂(大坂)の誕生ともいえる。「天下の台所」や「水の都」に代表される経済や文化の先進